

**立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)**

**大学院学生研究**

**2016年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院	文学	研究科	比較文明学	専攻		
<b>研究代表者</b> (2017年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年		氏名				
	文学研究科比較文明学専攻 博士課程後期修了		猪口 純 印				
<b>指導教員</b>	所属・職名		氏名				
	文学研究科・教授		佐々木 一也 印				
<b>自然・人文・社会の別</b>	自然	・ <input type="checkbox"/> 人文	・ 社会	<b>個人・共同の別</b>	<input type="checkbox"/> 個人	・ 共同	名
<b>研究課題</b>	〈多元的宇宙〉における死後生の考察 ——W. ジェイムズの宇宙像と死生観の関係について						
<b>研究組織</b> (研究代表者・共同研究者) ※2017年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年		氏名				
	文学研究科比較文明学専攻 博士課程後期修了		猪口 純				
<b>研究期間</b>	2016 年度						
<b>研究経費</b> (1円単位)	(支出金額) 135,568 円 / (採択金額) 200,000 円						

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究はウィリアム・ジェイムズの多元的宇宙論を、彼の一連の論考(プラグマティズム、根本的経験論、純粹経験論)が集束する最終着地点と位置付けた上で、その中に生と死がいかにか捉えられているかを探り、以て神や死後生をも射程に収めたジェイムズ哲学の今日的意義を明らかにしようとするものである。

上記目的の達成に向け、本研究は①ジェイムズの宇宙論及びその基礎を提供する実在論的見解が、あくまでも科学的探究の方法に則って導出されたものであることを明らかにし、②その筋道の上で神や死後生をめぐるジェイムズの仮説を再吟味するという二段階のプロセスを踏む。これらの過程を経て、神や死後生に関する仮説が従来の見方とは異なって多元的宇宙論の核心を成しているとともに、プラグマティズムの方法においてすでに暗示されていた考えであることを明らかにしていく。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 多元的宇宙論 ] [ プラグマティズム ] [ 死後生 ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の主眼は、科学的探究の方法たるプラグマティズムから多元的宇宙論へと至る筋道の跡付け、ならびに神や死後生をめぐる考究の理論的基盤を提供するものとしてのジェイムズ哲学の再検討である。かかる主題に取り組み、ジェイムズの今日的意義を問うた具体的成果を記す前に、ジェイムズ思想とそれを取り巻く現在の状況に関する基本的事実をここで確認しておきたい。

ジェイムズはその著書『宗教的経験の諸相』において、自らの「過剰信仰」と断りつつ、神や死後生に関する仮説を提示していた。これらの仮説は後の宇宙論的思弁にも引き継がれ、終生保持され続けたが、ジェイムズ自身の慎重さから、ついに宇宙論の一翼を担う要素として押し出されることはなかった。今日のジェイムズ研究においても、彼自身が注記するところにしたがって、これらの仮説はその他の学説(とりわけプラグマティズムの方法)とは通常切り離されたものと考えられている。現代におけるジェイムズ受容のあり方は二通りに大別され、一つはその本領をどこまでもプラグマティスト(この場合、感覚的経験を越えた問いには断固として関わらず、いかなる判断においても狭義の機能性・有用性のみ基準を置く立場)と見なした上でジェイムズ思想全域を読み解く方向であり、英米ならびに本邦におけるジェイムズ受容の主流を成す。この視座によれば、プラグマティズムに関連して述べられた種々の仮説は、言葉選びのまずさに起因する読者側の誤解(J. マーフィ)に回収され、実際には比喩に過ぎないものと見なされるか、ジェイムズ個人の特殊な信仰心に基づく余計な提案(H. パトナム)であったと断じられるかして、いずれにしても退けられることになる。いま一つのあり方は、プラグマティストとしてのジェイムズを切り離した上で、彼の宇宙論や死生観を理解しようとする方向である。この場合には、ジェイムズ思想は英米における神秘思想の諸系譜やキリスト教神学の延長上に把握されることとなり、現代宇宙論と通底する側面が指摘されるときにも、方法的・論理的支柱を欠いた直観が偶然に相似的な理論を形作ったと結論される。

しかし本研究は、神や死後生をめぐるジェイムズの仮説はむしろ多元的宇宙論の中核を成しており、プラグマティズムの方法においてもすでに暗示されていた発想であることを明らかにする。確かに、しばしば指摘される通り、その宇宙論や死生観は、ジェイムズ個人の宗教的背景や宗教的信仰といった基礎の上に、心理学的知見からの類推を集積することによって初期の輪郭付けを施されている。しかしながら、少なくともその著作『プラグマティズム』以後には、科学的手法から一見宗教的に映る仮説にまで至る論理的筋道が開削されているのである。

さて、冒頭に示した目的の達成に向け、本研究は①ジェイムズの宇宙論及びその基礎を提供する実在論的見解が、あくまでも科学的探究の方法に則って導出されたものであることを論証し、②そこで論証された筋道に沿って神や死後生をめぐるジェイムズの仮説を再吟味するという二段階のプロセスで遂行された。まず①に関する詳細を記す。

ジェイムズのプラグマティズムが多元的宇宙なる描像を帰結し、超越的次元まで達する理由は、一般的なプラグマティズム(C. S. パースの〈格率〉を継承する、知的探究の規範としてのプラグマティズム)が通常、措定された共通現実において「現に働いているものしか考慮しない」という消去法の態度で臨むのに対し、ジェイムズは「意識にもたらされたものすべてを考慮に入れる」、あるいは「何らかの効果をもたらすものはすべて相応の実在性を持つ」という積極的な見方の下で、無数の個別的经验の流れに定位するためである。多元的宇宙論は一種の多世界論として理解しうるが、伝統的な多世界論が世界内部の複雑性を解消するために外在的な複数世界の存在を主張する(あらゆる可能的事象は必ず何処において現実化するために、世界の不確定性や偶然性を見かけのものに過ぎないという論法をとる)のに対して、上述の構えを崩さないジェイムズにおいては、世界の複雑性はそのままに受け止められる。すなわち、世界とは複数の独自の秩序(「純粹経験」と呼ばれる、それ自体が一つの宇宙であろうとするもの)が群れ集まった、一種の集合体として認識されることになる。

このように整理すると、ジェイムズが徹底して個別的经验に拘り、ときに過激なまでの個人主義を表明していた理由が、理論的背景に基づいて解明される。また同時に、C. テイラーが『今日の宗教の諸相』で展開したような、宗教における集団的結びつきをなべて非難する者、個人の意志と感情を不当なまでに称揚する者というジェイムズ批判は、まったく的外れであるということが明らかになる。ジェイムズを相手取るテイラーの宗教論はむしろ、ジェイムズが被りがちな誤解を丹念に指摘するものとして優れた機能を発揮する。

ジェイムズの真意を理解するには、テイラーのようにその宗教論にだけ注目したのでは不十分で、宇宙論的視野から物事を論じている部分にまで踏み込んでいく必要がある。そこまで踏み込んでようやく、ジェイムズの考える〈個〉の範疇が、単なる個人や、物理的な一単位といった通常認識に収まらないものであることが明晰になる。ジェイムズにおける〈個〉とは、簡潔に言えば〈ひとまとまりで働いているもの〉である。現代的な語彙を用いるなら、何らかのシステムとして働いているものがなべて〈個〉と見なされるのである。このことは「純粹経験」なる、宇宙の究極的構成要素の定義によってはじめて我々の知るところとなり、そこから諸論考を捉え直すことによって、個別のもの働きを何よりも優先的に考えたジェイムズの真意が理解されるのである。

## 研究成果の概要 つづき

したがってジェイムズは、決して個人だけが世界の開示者である（あるいは、創造者である）と考えていたのではなく、究極的にあらゆる個別のまとまりが世界の開示者であると考えていたことになる。システムとして働くあらゆる個別のものが、ときに入れ子となり、ときに重なり合い浸透し合いながら、それぞれ独自の仕方世界を開こうとする。関係を集約し、解釈し、そこに一つの統一をもたらそうとする。宇宙とはそうした個別の統合が織りなす綾だというわけである。個人主義への傾斜はこの、(統一はあくまで個別的に遂行される) という存在論的・宇宙論的見解の根本的原理の、一つの表現型に過ぎないのである。既存の文脈に支えられた観念・象徴・制度の力が強大であることは否定できない(だからこそ『宗教的経験の諸相』においても、それらは一つの完成でありうるし、やがてはすべてを一つの体系に統合することもあるかもしれないと、持論を曲げるような不可思議な留保がつけられていたのである)。しかし人間一人一人の意思の力もまた、それらを強固にしている力と本質的に異なるものではないのである。そのことを言おうとして、勢い組織的結びつきや観念の役割を全否定するかのよう論調になってしまったというのが、本研究の主張する真相である。

以上のことを踏まえ、②の詳細へ進む。ジェイムズの宇宙論・実在論は、『宗教的経験の諸相』にも先立つ『信ずる意志』においても次のような形で予告されていた。「ある事実にかんしては、その生起にたいする我々の信念が前もって存在しなければ、その事実そのものがまったく起こりえないような事例が存在する」(WB 28-9)。後の『プラグマティズム』で論理的裏付けを得るこのような見解は、宗教及びそれが信仰する超越的存在に関しても適用可能であるとされる。「なぜ見えない世界の実在が、みなわたしたちがするような、宗教的魅力にたいする個人の応答に、依存しないことがあるだろうか、わたしには分からないということを告白する。要するに、神自身が、わたしたちの忠実さから、活力に満ちた力や、存在の増大を引き出しているのかもしれないのである」(WB 55)。上述のテイラーはこのような見解について、「わたしたちが創造するのは神や永遠それ自体ではなく、そうした神や永遠についての理解やそれによる救い」であるという穏健な解釈をとり、「このより強い主張(上記 WB 55 の記述: 筆者注) さえ、神にかんして一定の真理を要求できるかもしれない」との考えは、ごく控えめに注の中で示すに留めた。しかし実はテイラーが前面に押し出さなかったこの発想こそ、『諸相』の誤解を払拭するとともに、神や死後生をあり得るものとして受け容れるジェイムズ哲学の入り口なのである。

こうして本研究はテイラーの議論を経由して、直観と類推による初期の発想—プラグマティズム—多元的宇宙論—神と死後生) をひとつつながりのものとして示すに至ったわけであるが、さらにもう一つ、必ずや銘記しておかねばならない論点が存在する。それは、ジェイムズにおいては超越的な次元もまた、様々に独自の秩序を保ちながら、他なる秩序と各々並行して存在し得るものと考えられていることである。このことは事実上総括となった投稿論文において、我々各人が心に抱く〈彼岸〉の観念を媒介に説明することとなった。以下に大略を示す。まず〈彼岸〉(あるいは他界。死後生の舞台として想定されるもの) というものについて、その実在の真偽を問うのではなく、あくまで存在するものと仮定した場合に、各人が採用しうる世界観のヴァリエーションはどのような形で何通り考えられるかという問題提起をすることから議論を開始した。つまり、彼岸についての現に存在する複数の信仰と、自らがその実在を信じ、死後参入する場所であると信じるところの彼岸とを、人はどのような方法で整理し、折り合いをつけることができるであろうかという問いを、ジェイムズ哲学への導入に用いたのである。さて、信仰の具体的内容には踏み込まず、ごく抽象的にその可能な仕方を列挙していくと、まず (1) 自らが信じる彼岸こそ唯一真正の実在であり、他のすべての描像は誤りであるという、宗教的信仰において典型的な形式が挙げられる。次いで (2) 彼岸は唯一無二であるが、その描像は現世における様々な制約ゆえに雑多なものとならざるを得ないという理解が考えられる。これは J. ヒックに代表されるような宗教的多元論の見方で、すべての彼岸像はただ一つの真理をめぐって語られる比喻のようなものと解釈する仕方である。宗教学者の島蘭進によれば、いわゆるニューエイジ運動や、本邦において〈精神世界〉などと呼ばれている神秘的思潮も、おおよそこのような見解に収束しているという。最後に可能な形式として挙げられるのは、(3) 様々な信仰が描く彼岸は、それぞれ固有の仕方現に存在する、あるいは一定の実在性を有しているという見方である。管見の限り、これは現実に類例を見ることのできない理解の仕方であり、ともすれば自他の関係について考えることの放棄とも受け取られかねない立場である。しかしそこにこそ、現代を生きる者にとっての盲点があると同時に、大いに探查されるべき可能な道筋があるとは考えられないか。事実、かつてこの道筋を探查しようとした人物も存在している。彼こそはウィリアム・ジェイムズその人であり、我々は今こそ彼の思想を紐解くべきではあるまいか。その後、前述したテイラーによる批判を補助線としてプラグマティズムと多元的宇宙論との関係を明らかにし、もって本研究の全行程を総括する。テイラーと H. ドレイファスの実在論や Q. メイヤサーの思弁的唯物論との比較など、準備が整いながらも盛り込むことのできなかつた内容も多いが、上記の内容を一本の論考として提出できたことは非常に有意義な成果と言えるであろう。

※この(様式 2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

2017年4月現在 審査待ち投稿論文

『比較文明』(比較文明学会機関誌) 第33号

「多元的宇宙の神と死後生——W. ジェイムズの哲学に見る〈彼岸〉の複数性」